



土岐市	教育研究所
TEL	0572-54-1111 (内374)
FAX	0572-55-6310
メールアドレス	kyoiku@city.toki.lg.jp
所報	No. 585
発行責任者	所長 西尾 実
発行日	令和8年 1月 20日
題字	長谷川 広和 教育長



『ぴっかりこ、みーつけた！』
活動の振り返り』

撮影

駄知小学校附属幼稚園

亀井 敬恵 先生

「多様性(ダイバーシティ)の包摂(インクルージョン)」

土岐市教育研究所長 西尾 実

今年、第3次土岐市教育振興基本計画「夢絆プラン」スタートの年です。この計画は、現行の学習指導要領や県の教育振興計画に基づいて策定するものです。現行の学習指導要領はアクティブラーニングを看板に3つの資質・能力の育成を目指していますが、もう既に令和12年からの次期学習指導要領の準備が着々と進んでいます。これまでのものと大きく流れは変わらないと言われていますが、令和3年1月中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の中で示された多様性と包摂性は、これまでの日本の教育の在り方を変えるものと私は捉えています。少子高齢化や人口減少等で社会構造が変化する中、「多様性の包摂」は、次期学習指導要領を検討する3つの方向性の一つに示されています。

学習指導要領に頻出するワードである資質・能力の育成は、その言葉の通り、人間性などの資質と呼ばれる態度面や認知力・非認知能力も含めた総合的な「生きる力」としての能力として育むものとされています。不確実性の世の中が到来するから、自分で舵を切っていく事ができる能力を学校にいるうちに身に付けなさいと追いつめられるような気がするのは私だけでしょうか。

勅使河原真衣氏は、著書「働くということ『能力主義を超えて』」の中で、能力主義と人間観について次のように述べています。

『たった一人で達成するものの小ささたるや、どんな状態であれ、とりあえず前を向いて、何とか進んでいる、これが仕事の原型、もっと言えば人生の全貌です。—中略—

私たちの社会は、「自立」を目指すばかりに、本来組み合わさってなんぼの人間を「個人」に分断し、序列をつけて「競争」させる—これを学校で、職場で、こと現代はしこたまやりすぎました。そこから生まれたものは、大多数の方々「生きづらさ」に他ならないのではないのでしょうか。』

確かに今の学校現場には、能力主義による序列化が様々な場面であります。学力テストの全国平均との比較や内申書作成のための5段階評定等々。私たち教員の心のどこかに能力主義的な思い込みが染みついていると思うことがあります。この著書の中で紹介されているレゴブロックの話です。「レゴブロックは、色も形、大きさも異なる多様なピースからなり、一つのブロックでは存在価値が見えにくいほどちっぴけだけど、それらをうまく組み合わせることで個々のブロックの小ささからは想像だにしないオブジェクトが創作されます。」

学校も学級もこの1年いろいろあったけど何とかやってこられた。みんなのおかげでなんとかできた。多様な個性が組み合わせあって、思いもよらない価値を生み出すこともある。だから、学校という場所は面白い。いろいろな人がいて面白い。強い個人がよい社会を創るのではなく、良し悪しや優劣をつけず、人と人との持ち味を組み合わせ、なんとかかんとかやっていく。脱能力主義の緩やかな感覚がこれからの学校教育における多様性の包摂には必要ではないかと考えています。

笑顔と思いやりのあふれる学校

下石小学校 校長 長瀬 久美子

下石小学校の校長室の窓からは、校舎や運動場ではなく、通称「裏山」が見えます。15年ほど前、私がこの学校に勤めていた頃、「裏山」は子供たちの遊び場で、休み時間になると一緒になって鬼ごっこをしたり、松ぼっくりやドングリの実を探したりしていました。

校長室から一步廊下へ出ると「地域とともに 下石小学校150年の歩み」というパネルが掲示されています。そこには、明治6年3月1日、下石村4番地に『豹変義校』と称する学校が創設された、と記されています。明治5年に学制が發布され、すぐに学校を建てることができなかった地域では、寺や神社を間借りして『○○舎』『○○学校』という名でスタートさせたようです。土岐市内では、下石小学校だけが『義校』としてその歩みをスタートさせています。『義校』とは、地域住民の寄付などによって建てられた学校のことだそうで、下石小学校は150年以上前から、地域の方々に支えられている学校なのだと改めて感じます。

下石小学校の子供たちは、サイクリングロード(旧東濃鉄道駄知線の廃線跡)を歩いて登校し、最後に100段ある階段を上がってきます。今日も、1年生と手をつないで一緒に階段を上がってくる子供たちと、朝のあいさつと笑顔を交わしました。こんな素敵な下石小学校の子供たちには、「おはよう」と元気に登校し、友達や先生と楽しく一日を過ごし、「さようなら」と笑顔で帰っていく、そんな子に育ててほしいと願っています。

下石小学校では、昨年度に続き今年度も「主体的にかかわり、やり抜く力 ～自分で、自分から、最後まで～」を子供たちに付けたい力とし、教育活動を進めています。子供たちが、笑顔と思いやりのあふれる学校を目指し、委員会活動を通して創り出した取組の一部を紹介します。

◇安心安全な環境づくり

生活委員会では、階段を上がる子下りる子、どちらの子のことも思いやり、狭い階段を安全に通行するために、右側歩行を呼びかけるカードを作成しました。そのカードをポールに貼って階段の中央に設置し、全校が安全に過ごすことができる環境づくりを行っています。



◇異学年との仲間づくり

今年度から縦割りグループがなくなったことで、異学年同士が交流する機会が減りました。そこで、互いを思いやり触れ合う場として、運動委員会が学年対抗ドッジボール大会や外で遊ぼうキャンペーンを企画しました。これを機に、休み時間に異学年同士が誘い合って集まり一緒に遊ぶなど、異学年との関わりが広がっています。

◇歯と口の健康づくり

給食後、いつも丁寧に歯みがきをしている子の頑張りを紹介したい、という保健委員会の思いから、歯みがき名人表彰式を行いました。各学級から選ばれた名人には、表彰状と折り紙で作ったプレゼントが渡されました。毎日の歯磨きを大切にする委員会の活動は、風邪に負けないぞキャンペーンなど、心と体の健康づくりへとつながっています。



このように、下石小学校の子供たちは、自分たちで考え、自分たちで何かを創り出し、やり遂げようとする力をもっています。その力をさらに引き出し、伸ばし、鍛えることが、私達の使命であると考え、これからも教育活動を推進してまいります。

イキイキ ウキウキ ワクワク こども園って 楽しい！

妻木こども園長 後藤 聡子

本園では、園目標である『心豊かで明るく健やかな子～体イキイキ・心ウキウキ・思考ワクワク～』の育成に向けて、今年度は『イキイキタイム(クラス活動)』『ウキウキタイム(異年齢ペア活動)』『ワクワクタイム(異年齢活動)』を設け、運動遊びや異年齢での遊びに取り組んでいます。

そして、「妻木」から名付けたスター(星)の木『つまっきー』と、三つのスター(げんきスター・やさしさスター・チャレンジスター)をもつ『スターマン』のキャラクターを活用し、園生活の中で一人一人のよさや友達のよさを認め合うことを大切にしています。

妻木こども園キャラクター



『つまっきー』



『スターマン』

げんきスター

- ・「おはようございます」などの挨拶をする。
- ・自分で身の回りの準備や片付けをする。
- ・身体を動かして遊ぶ。

など、生活習慣の自立や意欲的な姿を認めます。

やさしさスター

- ・自分の思いを伝えたり、相手の気持ちを知らうとしたりする。
- ・どうしたらよいのかを一緒に考えられる。
- ・友達のよいところを見つける。

など、子どもたちの思いや友達を思いやる姿を認めています。

チャレンジスター

- ・「やってみたいけど、できるかな…」
 - ・「あんなふうに、できるようになりたいな」
- など、揺れ動く気持ちを抱きながらも、やって

みようとしてチャレンジする姿やその過程を認めています。

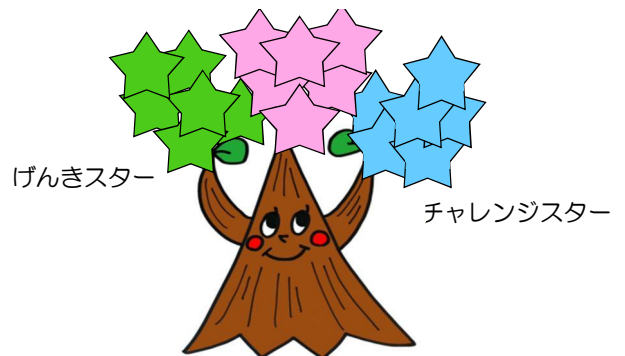
活動後には、自分や友達がどのような姿だったのかについて、子どもたちの思いを聞きながら一緒に振り返ります。その中で集まった、げんきスター・やさしさスター・チャレンジスターを『つまっきー』の枝にそれぞれ貼っていきます。スターが増え、枝がぐんぐんと伸びていくことで、子どもたちは自分たちの成長を感じることができます。

そして、次の活動へ向けて「どうしたいか」という子どもの声を聞き、その思いが尊重されるよう、保育者はその思いを大切にしながら他の子どもたちへとつないでいきます。

子どもたちが園生活や遊びの中で、「やりたいこと」や「やりたい遊び」が実現したり、さらに発展したりしていく楽しさを感じ、みんなでその子のよさを認め合うことで、「自分っていいな」「友達っていいな」と感じてほしいと思っています。

各家庭のかけがえのない大切な子どもたちが、毎日「こども園って楽しい！」とイキイキ・ウキウキ・ワクワクしながら登園し、保育者との信頼関係のもと、安心して自分らしさを発揮できることを願っています。

やさしさスター



研究主題：主体的に学び、互いに高め合う児童生徒の育成

1 研究主題設定の理由

研究を始めるにあたり、泉中学校区の児童生徒の実態と共通課題（願う児童生徒の姿）を以下のように捉え、研究主題を設定した。

【実態】

- 方法が分かれば、意欲的に課題解決に取り組むことができる。
- 仲間のよさを認めながら、共に学ぼうとすることができる。
- 学習習慣や主体的に学習に取り組む態度に課題が見られ、分かったつもりでいて、確かな学力が定着していかない。

【共通課題（願う児童生徒の姿）】

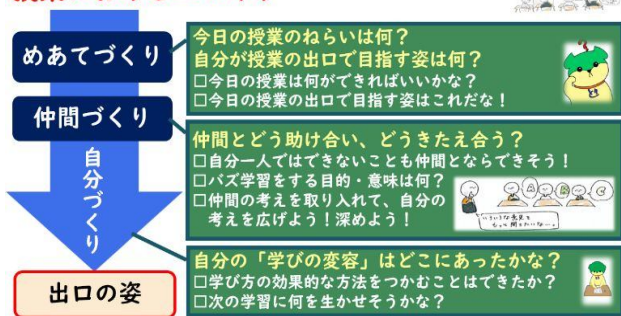
- ①自ら問題意識をもち、見通しをもって課題解決することを通して、学ぶ楽しさを味わう児童生徒
- ②仲間と関わる中で多様な考えにふれながら、自らの考えをもち、主体的に表現しようとする児童生徒
- ③よりよいものを求めて、粘り強く努力する自分や仲間の姿に誇りがもてる児童生徒

【泉中学校区の研究主題】

主体的に学び、互いに高め合う児童生徒の育成

泉三校で「授業における三づくり」を共通理解して授業づくりに取り組んだ。これは、出口で目指す姿を明確にする「めあてづくり」、仲間と考えを広げ深める「仲間づくり」、授業全体を通して培われる「自分づくり」である。

授業における三づくり



2 研究仮説

【研究仮説】

主体性を引き出す導入と課題設定を工夫し、仲間と考えを広げ深める対話的な活動と、確かな学びを自覚する評価について、意図的な取組を積み重ねていけば、主体的に学び、互いに高め合う生徒を育成することができるだろう。

3 研究内容

- 【1】 主体性を引き出す導入と課題設定の工夫（めあてづくり）
- 【2】 仲間と考えを広げ深める対話的な活動の工夫（仲間づくり）
- 【3】 確かな学びを自覚する評価の工夫（自分づくり）

4 研究実践

【研究内容2】における、仲間との交流について紹介する。

小学校では、目的に応じてペアやグループをつくり、主体的に話し合いを行う姿が見られた。また、教師が子どもたちの学び合いの意図を捉えながら見届け、価値付けることによって、児童自身が学びの成果を実感することができた。



中学校では、仲間と協力することで解決に向かう必然があり、協働的な学びとなるような「バス学習」を工夫した。課題解決に必要な実験内容を自分達で決定したり、不十分な点は、他の班から情報を取り入れたりすることで、生徒自ら学習を発展・深化させていくことができた。

バスの目的	バスの形態	バスの種類
発見バス 取り組む課題を見つけて、見通しを立てる。資料から分かることなど多岐にわたる内容を掘り出し、考えを広げる。	個人バス 一人 ペアバス 二人 グループバス 三人以上	輪番法 一人一人順番に話す 全員発言を促す時に有効
確認バス 個人課題など、学習の進捗を確認し合う。確認の仕方を話し合う。	生活種で	指名法 班長が指名する 他の人の発言を受けて、次の人が話す時に有効
探究バス 探究の考えを深める。	目的別バス	自由発言法 自由な発言を促す時に有効
創作バス 作品を制作する。	スクランブルバス 色々な仲間と お出かけバス 他の班の仲間と	対人法 一人でも多くの仲間に対して自分の考えを伝えよう ペアバスをもとにして多くの人と会話をする時に有効

5 成果（○）と課題（●）

- 児童生徒の「やってみたい」という思いの引き出し、自ら課題意識をもつ児童生徒が増加した。
- 交流から生まれる新たな考えへの気づきが見られた。
- 学習に対して、自身の成長を実感する姿が見られた。
- 教師は、児童生徒主体の学習を仕組む中で、効果的な教師の出場を工夫していく必要がある。
- 学びがより深まる対話的な活動をさらに工夫する。
- 確かな学力が身に付いているかについて、具体的な数値を基にした検証が必要である。

6 今後に向けて

今後も泉三校の「三づくり」を柱とし、「主体的に学び、互いに高め合う生徒の育成」に努めたい。

土岐津中学校区「課題解決指定」後の歩みについて

土岐津小学校・土岐津中学校 研究推進部

1 はじめに

土岐津中学校区では、「主体的に学び合う児童生徒の育成」を校区の研究主題とし、研究仮説を「必然性のある課題を設定し、『個の学び』を補う『仲間との交流』がある学習過程の工夫をすれば、『できた』『わかった』を実感し、主体的に学び合う児童生徒を育成することができる」として、実践を行ってきました。

2 令和6年度までの成果と課題

(1) 成果

導入、展開、終末のそれぞれの場面について「主体的な姿」や「学び合う姿」が生まれるような手立てを工夫することで、以下のような成果を得ることができました。

- ・展開において、交流の目的を明確にすることにより、児童生徒が目的をもって話し合えるようになった。
- ・終末において、「本時の学び合いのよさ」を児童生徒の姿で価値付けることにより、自己有用感を高め、学び合ってよかったという実感や、次時への意欲につながった。
- ・全国学力状況調査において「自分にはよいところがあると思いますか」という質問に対して「はい」と答えた割合が上昇しており、主体的に学び合う中で自己有用感を高めることができた。
- ・校区で研究を行うことで、9か年を見通し、小中で連携をしていこうという職員の意識が高まった。

(2) 課題

児童生徒が主体的に学ぼうとする姿は増えたものの、全員が学習内容を確実に理解し、それを定着させているかという点については、小テスト等の結果などからまだ不十分であるということがわかりました。それらを解決するためには、授業者が教科の内容についてさらに深く理解し、見方、考え方を働かせる場の設定や、考えを深める補助発問など、教科の授業力をさらに向上させる必要があると考えました。

3 令和7年度に取り組んでいること

昨年度までの研究結果を受け、目指す姿を「主体的に学び合い、確かな学力を身に付ける児童生徒」とし、「効果的な小中連携の継続」と「学習内容の定着や理解を進めるための専門教科別授業力の向上」に、校区として取り組んでいます。

<小中連携の継続>

- ・研究内容や全体計画を共同制作する。
- ・研究授業に参加し、授業のやり方や児童生徒の様子を交流する。
- ・中学校の行事に小学生を招待し、小学生にとっては「目標や見通しをもつ機会」、中学生にとっては「自己を高め成長を自覚する機会」とする。

<専門教科別授業力の向上>

・導入について

作品を作る前にイメージを膨らませる時間をじっくりと取ることで、見通しをもって制作に取り組むことができた。(小学校図画工作)



・展開について

キャッチボール交流を実践し、生徒のつぶやきに対して深めの発問を行うことで、生徒が自分事として考えを深めていくことができた。(中学校社会科)



・終末について

評価問題の一部を「説明する」問題とし、算数的な見方を働かせた表現力を向上させることができた。(小学校算数)

4 おわりに

今回、校区で研究を行ったことにより児童生徒の姿を9か年という広い視点で考えることができ、より効果的な取り組みができたと感じています。今後も小中で連携を密に行い、9か年を意識した取組を推進していきます。



1 取り組み内容

- ・令和6年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果分析
- ・児童生徒能力開花応援事業「運動能力パワーアップ講座」
- ・ACP（アクティブ・チャイルド・プログラム）を活用した効果的な指導方法の立案、「ACP活用推進研修会」での提案
- ・体力向上に力を入れている幼稚園への参観

2 成果

(1) 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果分析

土岐市全体の運動体力を分析した結果、小学生では、「瞬発力・敏捷性・脚力・跳躍力」といった運動能力が育まれるような遊びや運動を取り入れる必要があることが分かった。また、中学生では、「筋力・投力・巧緻性・瞬発力」といった運動能力が育まれるような遊びや運動を取り入れる必要があることが分かった。児童生徒が運動に親しむために、「どのような運動を行うとよいか」よりも「運動を促すきっかけ」をつくっていくことが重要となってくる。そこで、課題解決委員会より、「運動パワーアップ講座」や「ACP活用推進研修会」で実践できるような内容を提案することができた。

(2) 「運動能力パワーアップ講座」の実施

市内の小学生を対象に行った「パワーアップ講座」では、多くの児童が参加した。他校の異学年の児童と一緒にいるようにグループを編成し、アイスブレイクからリズムトレーニング、ボール遊びを行った。アイスブレイクで心と体をほぐすことで、他校の児童とも話せるようになり、一緒に運動を楽しむことができた。リズムトレーニングでは、リズムに合わせて拍手したり、ハイタッチしたりする姿があった。ボール遊びでは、正しい投げ方を意識して正確にまことに当てようと

していたり、仲間と協力して思いっきり遠くへ投げたりする姿があった。参加した児童は、運動を通して他校の児童と多く関わり、笑顔で運動することができた。



＜ボール鬼ごっこ＞

(3) ACPを活用した効果的な指導方法の立案、「ACP活用推進研修会」での提案

ACP活用推進研修会では、土岐市の運動体力を分析した結果をもとに、複合的な動き（コーディネーショントレーニング）の要素を兼ねているACPや、「投」を伸ばすための運動、リズムトレーニングを提案した。各学校の取り組み状況として、西陵中学校では、長期休み明けの体づくり運動や普段の保健体育の授業にACPを取り入れた。泉中学校では、体づくり運動でACPを取り入れたり、準備運動として行ったりした。小学生から中学生までが楽しめるACPとなると、少し難しいかもしれないが、「楽しさ・運動量・負荷」を学年に合った活動になるように工夫し、各学校で多く実践していけるとよい。



＜ハイパードッジボール＞

3 課題

(1) 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果分析

今年度、課題解決委員会として、体力向上に関する現状と課題を分析すること、体力向上プログラムを企画・開発し、市内小中学校に広めること、学校における体力向上活動を支援する具体的な方策を検討すること、「運動好きなこども育成事業」に協力し、児童生徒の運動習慣を促進することを目的として1年間活動してきた。これらのことを全て網羅しながら取り組むことには少し難しさを感じる。今後は、目的をさらに絞った状態で各学校に提案し、児童生徒の体力向上に関する課題解決を目指していくことが必要である。また、小学生や中学生といった幅広い年齢の活動内容を考えるだけでなく、ゴールデンエイジを対象として多種多様な運動に触れられるような活動内容を提案していきたい。

(2) 「運動能力パワーアップ講座」の実施

運動能力パワーアップ講座の講師を教員が行うことで、幅広い運動能力を高められるような活動を行うことができた。さらに、体力向上に特化するために、高めたい能力を絞り、その能力に合う活動を外部講師の方に教えていただく機会をもちたい。児童生徒だけでなく、各学校のACP推進担当教諭にも広められるような講座になると、市内全体で体力向上を目指すきっかけになると考える。

(3) ACPを活用した効果的な指導方法の立案、「ACP活用推進研修会」での提案

今年度は、課題解決委員会よりACPを活用した指導内容を提案した。今後、各学校で取り組んでいることや独自の取り組みなどを交流する機会をもち、市内全体で体力向上に向けて取り組んでいきたい。市内で交流するために、校内でACP推進担当者を中心に各学年で行っているACPを活用した運動を共有することができる。さらに、ACP活用推進研修会で各学校の取り組みを共有し、各学校の先生方に伝達してもらうことで、市内全体で同じ活動に取り組むことができる。それぞれのよさを取り入れながら、児童生徒の体力運動能力を高めていきたい。

4 おわりに

今年度、以上のような成果と課題が明らかとなった。また、令和7年度の「全国体力運動能力、運動調査」の結果をみると、全国や岐阜県の平均と比較すると、多くの運動能力が大きく下回っている。幼少期から小中学生までの期間（ゴールデンエイジ）を対象に多種多様な運動を行うこと、中学生では、運動量を確保して体力を高めることなど、運動に継続して取り組んでいく必要がある。児童生徒の体力向上に向けて、各学校の授業や委員会活動等で、進んで体を動かす活動に取り組んでいきたい。

【駄知小学校附属幼稚園の運動の様子から学ぶこと】

12月19日（金）、駄知小学校附属幼稚園のサーキット（平均台、跳び箱、鉄棒、マットなど）に取り組む様子を参観させていただきました。

幼稚園の運動遊びの授業を参観した際、園児たちは終始笑顔で楽しそうに運動に取り組んでおり、失敗してしまった場面でも諦めることなく繰り返し挑戦する姿や、仲間の頑張りに対して素直に「すごい！」と褒め言葉を伝える様子から、心の成長や自発的な挑戦の力を感じることができました。

その姿を生み出す要因の一つが、先生の園児に対する関わり方や指導・援助の仕方です。先生は園児に対し、最初から最後まで常に援助するのではなく、「ここだ」というタイミングで必要な補助をする関わり方をしていました。その姿勢は子どもの挑戦心を尊重し、その努力を邪魔しないよう配慮されており、子ども自身が「できた」という達成感を実感できるよう、温かく寄り添っていました。

今回の訪問から、特に小学校低学年において運動や遊びに触れる機会をさらに増やすことが大切であると感じました。また、年間を通した指導計画を綿密に立てることや、子どもの運動能力を定期的に記録し変化を可視化することで、子ども一人ひとりの成長をより深く理解し、教育に反映させることの重要性も感じました。

「心にひびく言葉」

「生徒がくれた救いの言葉」



妻木小学校 教頭 伊藤 勝教

担任時代をすべて中学校で過ごしてきた私は、特に中学3年を受けもつことが多かった。

ある年、中学1年を担当することになった私は、毎年中学3年に話しているように担任の第一声を行っていた。「私は君たちを一切信用しない。いつも疑っているからそのつもりで。」

生徒たちはキョトンとした顔でこちらを見ていた。なんと横柄な態度の先生だと思ったことだろう。

この言葉には、「これからの生活の中で、先生にも信じてもらえるように頑張れという」思いを込めたつもりでいたが、今にして思うと、私が言った言葉は今の子どもたちのことを認めていないという、否定的な第一声となってしまった。

それから2年後、最後の期末テストの作文問題に「先生に言われた素敵な言葉」という課題を出した。この作文に、ある女子生徒がこう解答した。

「私の心に残っている先生の素敵な言葉は、1年生のときの担任に言われた『君たちのことを信用しない』です。なぜならば、今までそんなことを先生に言われたことがなかったし、私たちは3年間で様々な悪さをしてきて、多くをその先生に見つかり、叱られることができたからです。もし先生が疑って見てくれていなかったら、私たちの成長はなかったと思います。今になってその意味がわかりました。」

当時の自身の学級開きを反省しつつ、この女子生徒の成長と慧眼には驚かされた。そして、私はこの女子生徒の言葉に救われたのだった。

掲示板

市制70周年記念

TOKI スポーツフェスティバル 土岐市小学生ドッジボール大会



11月16日(日) 土岐津小学校体育館にて開催されました。市内から15チームのエントリーがありました。ボールを追う真剣な表情、湧き上がる歓声…白熱したゲームも多く、子どもたちの熱気が溢れる一日でした。優勝は以下のチームでした。

【わくわくリーグ】(低学年)

妻木ベビーブラザーズ

【エキサイティングリーグ】(高学年)

泉西レッカーパンダーズ

